

[成果情報名] 早春どりレタスのトンネル、無加温ハウス栽培

[要約] 平坦地のトンネル栽培や無加温ハウス栽培で、レタスを早春期に生産するための有望品種は「スターレイ」と「ウィザード」である。播種は12月中旬に一斉に行い、本葉3.5、4.5、5.5枚の3回に分けて定植することで、3月中旬～4月上旬の連続出荷が可能となる。

[担当] 総農セ・栽培部・野菜科・小澤明子

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 中北地域普及センター、果樹食品流通課

[背景・ねらい]

3～4月の早春期は県産野菜の供給量が少なく、需要の多い葉菜類等の生産が求められている。これまで県産レタスは、ステディなどの大玉系品種を用い、4月下旬に一斉収穫を行ってきた。

本試験では主に直売施設向けに、3～4月にレタスを連続生産するための技術の確立を目指して、トンネル栽培および無加温ハウス栽培に適した極早生品種の選定および定植適期の検討を行う。

[成果の内容・特徴]

1. 早春どりレタスの有望品種は、正常球率が高く、可販収量が多い「スターレイ」と「ウィザード」である（図1、図2）。
2. トンネル栽培、無加温ハウス栽培ともに、12月15日播きで、本葉3.5、4.5、5.5枚の3回に分けて定植することで、3月中旬から4月上旬に連続して収穫できる（図3、図4）。
3. 両品種とも定植時の本葉数が増す程、結球重が重くなる。本葉3.5枚定植では約450g、本葉5.5枚定植では約550gになる（データ略）。

[成果の活用上の留意点]

1. 128穴ペーパーポットに播種する。育苗は、無加温ハウス内の育苗トンネル（電熱線を敷いた温床の上に、保温のためのビニールトンネルを被覆したもの）の中で行う。
2. 定植1週間前になったら、順次、苗を寒さに慣らすための順化を行う。
3. 施肥はトンネル栽培、無加温ハウス栽培ともに、CDU化成などを用いて3要素成分量が各20kg/10aとなるように全面施用し、植え床には透明マルチを用いる。
4. トンネル栽培は畦幅150cm(床幅75cm)×株間27cm、2条植え（4,938株/10a）、無加温ハウス栽培は畦幅125cm(床幅75cm)×株間27cm、2条植え（5,926株/10a）とする。
5. トンネル栽培で用いる資材と設置法は、早出しスイートコーンと同様である。本試験で用いた被覆資材はトンネル栽培、無加温ハウス栽培ともに塩化ビニールである。
6. トンネル栽培において、定植後の温度管理を目的とした開閉は不要である。3月以降に温度が上昇したら、すそを開け放す。

[期待される効果]

1. 県産野菜の流通量が少ない早春期に、レタスの出荷が可能となる。
2. 複合経営の新たな補完品目として、平坦地の野菜農家や果樹農家が導入可能となる。

[具体的データ]

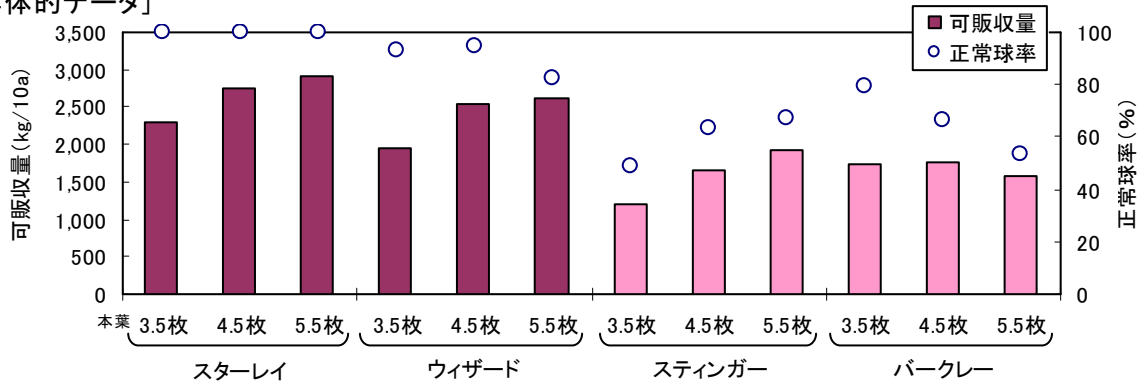


図1 トンネル栽培における可販収量および正常球率²⁾(2011年)

2) 中肋部突出球、腰高球、ねじれ球、タケノコ球等の結球異常が発生しなかった株の割合

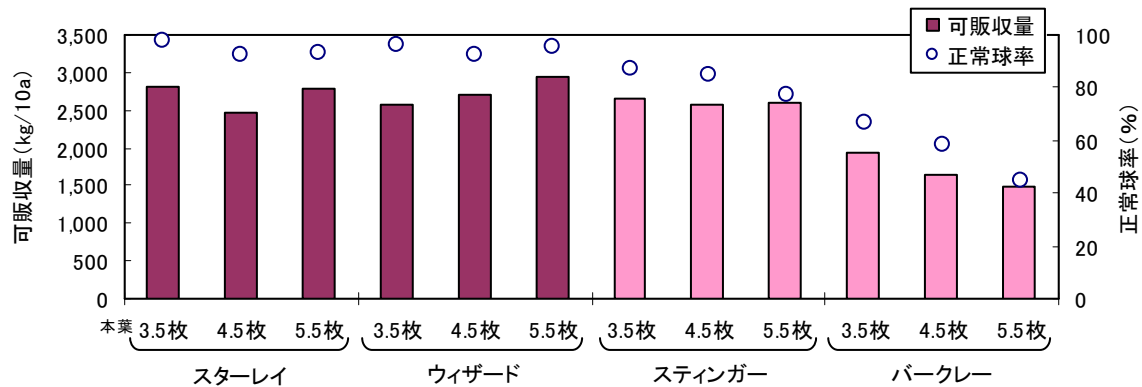


図2 無加温ハウス栽培における可販収量および正常球率(2011年)

品種	本葉	12月		1月		2月			3月			4月			
		中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
スターレイ	3.5枚	○			●										
	4.5枚	○			●										
	5.5枚	○				●									
ウィザード	3.5枚	○			●										
	4.5枚	○			●										
	5.5枚	○				●									

○: 播種、●: 定植(トンネル)、■: 収穫

図3 トンネル栽培における各品種の収穫日(2011年)

品種	本葉	12月		1月		2月			3月			4月			
		中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
スターレイ	3.5枚	○			●										
	4.5枚	○			●										
	5.5枚	○				●									
ウィザード	3.5枚	○			●										
	4.5枚	○			●										
	5.5枚	○				●									

○: 播種、●: 定植(無加温ハウス)、■: 収穫

図4 無加温ハウス栽培における各品種の収穫日(2011年)

[その他]

研究課題名：平坦地における冬期を中心とした省力品目の作期拡大技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011～2013年度

研究担当者：小澤明子、赤池一彦